

右半球損傷者の上肢機能回復過程における言語に表れる思考と身体性の変化 - 単一症例に対する介入中の言語の計量テキスト分析による検討 -

○上田 将吾¹⁾ 高木 泰宏¹⁾ 塚田 遼²⁾ 山中 真司²⁾ 吉田 俊輔¹⁾ 加藤 祐一¹⁾

- 1) 結ノ歩訪問看護ステーション
- 2) 結ノ歩訪問看護ステーション東山

【はじめに】

脳卒中者は損傷半球により異なる身体性を有する（上田，2019）が，この身体性が変化し得るのかは不明である．今回，右半球損傷者に対する介入中の発言を計量テキスト分析にて分析し，回復過程における言語の変化を検討した．回復過程における思考と身体性の変化について示唆を得たため報告する．

【方法】

対象は右被殻出血発症後9年が経過した60代の男性である．Fugl-Mayer Assessment上肢項目が59点から62点に改善するまでの10週間を対象期間とし，介入中の音声を録音した．録音した音声を逐語録としてテキスト化し，期間中9回の介入を前・中・後期に分け，対象の発言を分析した．各期で出現頻度の高い語同士の結び付きを可視化した共起ネットワークを作成し，その特徴から『上肢の使用』『動きの記述』『感覚の記述』『力の記述』のコード名とコーディングルールを作成した．例えば，『動きの記述』のコードは「動く」「動き」「動かす」のいずれかを含む文に付与される．各期における各コードが付与された文の出現数をカイ二乗検定にて比較した．分析にはKH Coder 3を使用し，有意水準は5%とした．さらに各コードが付与された文を質的に分析し，内容の変化を検討した．

【結果】

各期の比較では，全てのコードで有意差を認めた．『動きの記述』は前期から中期に大幅に減少した．『上肢の使用』は初期から中期で減少し，後期にかけて増加した．『感覚の記述』と『力の記述』は中期にかけて増加し，後期にかけて減少した．質的な分析の結果，『動きの記述』では，前期で身体の動きを理論的に説明したのに対し，中期では動きに伴う感覚，後期では左上肢の可能性に言及した．『上肢の使用』では，前期で麻痺側にのみ言及したが，中期では麻痺側と非麻痺側との比較，後期では行為における麻痺側上肢の使用に言及した．

【考察】

結果は，前期での身体の動きに偏った思考から，中期では動きが感覚や力と結びつき，後期では動きや行為が無意識化されたことを示すと考える．FittsとPosner（1967）は運動学習の過程を認知段階，連合段階，自動化段階に区分したが，言語から推察される身体性の変化も共通した過程を辿ることが示唆された．

【倫理的配慮（説明と同意）】

ヘルシンキ宣言に基づき，研究の目的，方法，不利益がないこと，プライバシーの保護について説明を行い，同意を得た．